

フオイエエルバッハの会通信 第97号

後期フオイエエルバッハの物神(Götze)評価

一前期フオイエエルバッハの汎神論的自然観との関係

石塚正英

ルートヴィヒ・フオイエエルバッハ(1804-72)は、1830年代から40年代にかけて、神と自然の同一性を軸とする汎神論的自然観を重視したといわれます。その汎神論(Pantheismus)という術語は、18世紀におけるその語の成立事情(汎神論論争=スピノザ論争)からいって、キリスト教思想圏にかかわります(狭義の定義)。その語は厳密には非キリスト教世界に妥当しません。汎神(論)は非キリスト教世界には類推・類似(広義の定義)としてしか存在しません。キリスト教の神(神観念)がありえない世界に、キリスト教の汎神(pan-theos)もありえません。古ゲルマンの樹木神や古日本の風の神のようなアニミズムならば存在しますが、それは個別の神々(多神)にかかわるのであって、森羅万象にあまねく遍在する一神にかかわるものではありません。

ところで、フオイエエルバッハの議論では、キリスト教は形像崇拜(Bilderdienst)という偶像崇拜です(Ludwig Feuerbach, *Gesammelte Werke*, hg. v. W. Schuffenhauer, Akademie-Verlag, Berlin, 1969, BD.6, S.211.)。唯一神であろうが理神であろうが、汎神であろうが、フオイエエルバッハは自然を貶めるようなキリスト教の神をいっさい許容していません。彼は我と汝(他我)の関係に自然をも加えていますが、その自然(自然神)はキリスト教神の息吹といった汎神でなく、自然それ自体です。

フオイエエルバッハは、たとえば南米オリノコ河畔先住民の自然神に注目しましたが、それは汎神でなく物神(Götze)であり、私の議論ではフェティシュ(Fetisch)です。フオイエエルバッハはフェティシュをGötzeというドイツ語で言い表しました。

フオイエエルバッハのGötzendienst(偶像崇拜)は、私の議論ではアニミズムでなくFetischismus(フェティシズム)です。後期のフオイエエルバッハを問題にするのであれば、汎神論は、非キリスト教世界に関連する彼の研究対象には妥当しないのです。かわって強まったのは非キリスト教的信仰に対する寛容論です。その側面は以下の文章に端的に表明されています。

「しかし人間学は信仰と迷信との区別に頭を悩ましたりしない。なぜなら、人間学は一神教を信仰として宣言し多神教を迷信として宣言するような有神論の偏狭な党派的立場に立っていないからである。人間学は人類全体に注意を払っている。人類全体においては、唯一神・排他的な神・そのみが真実の神は、たんに、時間的にも空間的にも多くの神々と並ぶ一つの神・多くのなかの一つの神として現れるにすぎない。したがって人類全体においては、不寛容な一神教は平和的かつ社交的に、たんに人類の多神教の一つの特殊な様式として明示されるにすぎない」。(フオイエエルバッハ『神統記』第一八章、ibid., Bd.7, S.128.)

狭義の汎神論は一神教にかかわるのだから、人類の多神教世界に汎神論を持ち込むと、それは不寛容となる。そのようにフオイエエルバッハは主張しているのだと思われます。

以上の議論は、はたしてフオイエエルバッハ自身の思想は汎神論的か否か、という問題とは相対的に別個です。非キリスト教圏の物神(Götze)という研究対象を汎神論的に考究したか否か、という問題です。私は、これまで、後者を問題にしてきたのです。そして、後者の問いにおいて、答えは「否」であると、私は結論づけています。物神(Götze)と

いう研究対象を——ド・ブロス著作『フェティッシュ諸神の崇拜』に学んだ私にすれば——フェティシズム的観点で考究したのです。前者の問題、はたしてフォイエルバッハ自身の思想は汎神論的か否か、という問題に関して、私は、学問的に断定できる研究蓄積をもつかのところ持ち合わせません。ただし、次のことは指摘できます。フォイエルバッハは、非キリスト教圏を対象とした時点で、キリスト教に起因する汎神論的自然観・世界観の通用しない地域文化のあることを悟ったことです。

本稿は、最近発表された川本隆「博士論文審査を終えて」（フォイエルバッハの会編『フォイエルバッハの会通信』第96号、20150925）および服部健二『四人のカールとフォイエルバッハ——レーヴィットから京都学派とその「左派」の人間学へ』（こぶし書房、20150925）の議論に触発されてしたためたものです。ついては、以下の参考資料1-3を併読願います。
(20151105)

参考1：川本隆「博士論文審査を終えて」（フォイエルバッハの会編『フォイエルバッハの会通信』第96号、20150925）

・以上が、本論文（学位請求論文「理性の神秘と自然の先在——初期フォイエルバッハの思弁的アプローチに関する一考察」）の大まかな骨子であるが、初期の汎神論的思弁性が唯物論的・人間学的転回後に完全に放擲されるのではなく、むしろ、新しい位相で生かされることを論証するに当たり、各章のどこに重要な力点があったかを概説しておこう。
(p.4)

・昨年6月のシンポジウム（日本ヘーゲル学会、明治学院大学にて）で河上睦子さんに「初期から後期へつながる思想はありますか」と聞かれ、「〈同時に極大でありかつ遍在するような極小〉というブルーノの汎神論の見方は、自然への深い気遣いとして後期でも息づいています」と応えたように思います。その視点はいまも変わりません。意識的な自我が、自然を私の「他我」として気遣う姿勢が後期においても持続するという含みです。
(p.9).

参考2：服部健二『四人のカールとフォイエルバッハ』（こぶし書房、20150925）

・『死と不死に関する諸思想』（一八三〇年）は、匿名ではあったが、フォイエルバッハの著作、しかもかれの最初の宗教哲学的著作である。（中略）かれは、この著作でヘーゲル的精神を汎神論的に自然と和解した精神として展開しながら、自己中心主義的な近代キリスト教の不死信仰や彼岸信仰を批判して、有限的な人間の生の中に無限性をみようとしました。かれのキリスト教批判——彼の全著作を貫く赤い糸——は、汎神論的生の立場にもとづいて近代神学の人間中心主義への批判として始まったのである。（p.59）

・フォイエルバッハの汎神論的自然哲学（p.102）

・「総合」でなく「和解」と表現することにより、ひたすら自然的なものを克服しよ（120）うとしたヘーゲルに対して、フォイエルバッハは精神の歩みを汎神論的自然の側からも捉えようとしていたのである。（p.119-120）

・非有機的自然における特性、質を靈魂ととらえるフォイエルバッハの背景には、すでに述べたようにブルーノやカンパネラの汎神論的世界観があった。（p.125）

・フォイエルバッハが人間と自然というデカルト的・二元論の発想をとらず、汎神論的一元論の伝統とカール・ダウブ的な自我の断念の発想に立って、近代の機械論的自然観と機械仕掛けの神という理神論的世界観を批判していると筆者が解読している（略）。（p.166）

・フォイエルバッハはヘーゲル的理性の立場を受容したかぎりヘーゲリアンであったが、ヘーゲルと異なって汎神論的な愛による美的直観によって自然と和解した理性の立場であった（略）。（p.194）

・対自然関係においては、『キリスト教の本質』に至るまでのフォイエルバッハの汎神論的自然概念（略）。（p.233）

・こうしてフォイエルバッハは一連の哲学史研究を通して、近代哲学の汎神論的精神をヘーゲル哲学へと収斂させるのではなく、ヘーゲル批判を行いながら、批判的-発生的哲学の方向において捉えていこうとしたのである。（p.280）

・フォイエルバッハは、『神統記』において、自然宗教、ギリシャ宗教、ユダヤ・キリスト教を、人間の生の願望に基づく投影理論によって統一的に分析しようという構想を示した。（p.298）

・筆者の立論は、フォイエルバッハがその汎神論的自然観によって、ダウプの立場からも、またヘーゲルの立場からも違った道を歩み始め、愛による美的直観によって自然と和解する理性の立場をとったことに力点を置いた。（p.302）

参考3：石塚正英『フェティシズムの思想圏』（世界書院、19910401）

・フォイエルバッハは、古代人——かれはよく「異教徒」と称している——が尊敬し、したがって崇拝する対象を、偶像（Götze）で表現する。「異教徒は偶像礼拝者（Götzendiener）であった。{イスラム教徒は偶像礼拝者でないが、これはここでフォイエルバッハが問題にしている古代宗教ではない} すなわち異教徒は自然を直観したのである。異教徒は、キリスト教を深く信じる民族が自然を彼らの嘆賞や倦むことがない探究やの対象にする際に今日していること以外の、どんなことをもしなかつたのである。（中略）自然研究は自然礼拝であり、イスラエル教的な神およびキリスト教的な神の意味での偶像礼拝（Götzendienst）である。そして偶像礼拝とは人間の 最初の自然観以外の何物でもない。なぜならば、宗教とは人間の最初の、そのために子供らしくまた民衆的な、しかしとらわれた不自由な、自然観および自己観以外の何物でもないからである。ヘブライ人はそれに反して、偶像礼拝を越えて神に対する礼拝に高まり、被造物を越えて造物主の直観に高まった。すなわちヘブライ人は、偶像礼拝者を魅惑していたところの理論的な自然観を越えて、自然を利己主義の目的へ隷属させる純粋に実践的な自然観へ高まったのである。「あなたはまた目をあげて天を望み、日月星辰、すなわち天の万象を見、誘惑されてそれらを拝みそれらに仕えてはならない！ それらのものは、あなたの神である主が全天下の万民に分けられた（すなわちおくられた—— *largitus est*）ものである」。* Reclam. S.189-190. Iwanami.1. p.247. * 『申命記』第四章第一九節。（p.102-103）

・『キリスト教の本質』出版の翌年、フォイエルバッハは「マリア信仰に関して」を、また一八四四年には「ルターの意味での信仰の本質」を発表する。そのどちらにも温故知新の姿勢がみられるが、一八四四年「異教における人間の神化とキリスト教における人間の神化との区別」では、その勢いがいっそう鋭く際立っている。「私が光のなかで神を崇敬するのは、もっぱら光自身が私にとって最も立派な存在者、最強の存在者として現われるからである。もちろん後に反省のなかで、人間がすでに光を超越し、光の神性または太陽の神性を疑う場合には、人間は神学のなかで、第一のものを第二のものにし、根源的な神を導出された神にする、すなわち事象（Sache）をたんなる 形像（Bild）にする。しかし民族の単純な宗教的感覚は神学的な反省が行なうこの区別立てを至るところでかつ常に廃棄する。民族は常にふたたび根原的な神に復帰する。すなわち民族はふたたび形像を、それが根原的にそれであったところのもの、すなわち事象にする」。* G.W.Bd.9.S.414.Funayama.15.p.198. (p.108)

・はたしてマニトゥ（南米先住民の神）は、先住民にとってなにゆえ神であるのか？ 見たり手に取ったり投げ棄てたりできる石ころやカタツムリの殻が端的に神であるからだ。また、時にそれは尊い神でもあり時に邪悪な神でもあるのだ。（p.111）

・少なくともマイナースを読んだからには、フォイエルバッハはフェティシユとかフェティシズムという語に接している。またフォイエルバッハ自身からして、一八四八年一月一四九年三月にかけて、例のハイデルベルグ市での講演で、バストルムとマイナースとを援用しつつ、次のようなフェティシズム言及を行なっている。「あらゆる対象が人間によってただ神として、または同じことですが宗教的に、尊敬され得るだけでなく、実際にも神として尊敬されます。この立場がいわゆるフェティシズムです。そこでは人間はあらゆる批判と区別立てとを抜きにして、人工物であれ自然物であれ可能なかぎりすべての対象・事物を己れの神にするのです。こうして例えばシエラ・レオネの黒人は角、ザリガニの鉗、爪、火打ち石、蝸牛の殻、鳥の頭、木の根を自分たちの神々として選び、それらのものを小袋に入れてガラス玉とその他の装飾品とで飾った首につけています」。(第二〇講) * G.W.Bd.6. S.201. Funayama.12. p.156. (p.114)

【書誌情報】

(1) 富村 圭「アルノルト・ルーゲのフォイエルバッハ受容——三月前期ドイツにおける教会論争の視点から」、『史学』第 85 卷 1-3 号、295-333 頁、2015 年 7 月 13 日

(2) 川本隆「書評：服部健二『四人のカールとフォイエルバッハ』汎神論的自然のアクチュアリティ 現代人にとって必読の高著」、『週刊読書人』、2015 年 11 月 13 日

(3) 柴田隆行「フォイエルバッハの実践 (5) カール・グリュンの理論と実践」、『季報唯物論研究』第 133 号、118-129 頁、2015 年 11 月 30 日

(4) シンポジウム「フォイエルバッハとヘーゲル——宗教をめぐる対話」、『ヘーゲル哲学研究』第 21 号、2015 年 12 月 20 日

池田成一「中期フォイエルバッハのキリスト教批判におけるヘーゲルの継承と批判」(pp.39-50)

河上睦子「フォイエルバッハ後期思想の可能性——「身体」と「食」の構想」(pp.51-63)

川本隆「ヘーゲルの思弁と初期フォイエルバッハの汎神論」(pp.64-75)

滝口清栄「シンポジウム総括」(pp.76-79)

事務局から

* 本紙は季刊発行です。次は 3 月発行予定です。ぜひ情報やお便りなどをお寄せ下さい。

* 年会費 500 円。郵便振替 00160-1-84468 「フォイエルバッハの会」。

* 本紙は、発行から約 2 週間後に下記ホームページにて pdf 版で公開します。

〈事務局連絡先〉

112-8606 文京区白山 5 丁目 28-20

東洋大学社会学部柴田研究室気付

フォイエルバッハの会

tamast@toyo.jp

<http://www2.toyo.ac.jp/~stein/fb.html>